

# 参照点の共有を通じた祭りの準備活動の展開可能性

## The possibility of developing festival preparation activities through sharing reference points

阿部廣二†

Koji Abe

† 早稲田大学

Waseda University

k.abe8@kurenai.waseda.jp

### Abstract

本稿では、祭りにおける御神体を祀る台の作成過程を、フィールドワークの知見、および参加者らの相互行為の観点から記述し、祭り準備の活動システム、あるいは準備参加者らの倫理について考察した。とりわけ、1) 相互行為を通して課題に対処することで、毎年安定的に台の作成を可能にしていること、2) それでもなお不確実性が残る場合、主観的判断による意思決定を行うこと、3) こうした意思決定が、祭りを自分たちのものにするために有意義であることが考察された。

**Keywords** — 祭り, 準備活動, 相互行為, 参照点

### 1. はじめに：フィールドの概要および対象とする現象

本稿では、長野県野沢温泉村の道祖神祭りにおける、御神体を祀る台（以下「御神体台」）の作成過程を、フィールドワークによって得られた知見、および参加者らの相互行為の観点から記述する。

フィールドの概要を示す。本稿のフィールドは、長野県野沢温泉村によって開催される、野沢温泉道祖神祭りの準備活動である。野沢温泉村は、山に囲まれた豪雪地帯である。道祖神祭りは、その豪雪のただ中にある真冬の1月に開催される。祭りでは、村内に大量の雪を固めた広場を作り、そこに社殿と呼ばれる巨大な台を建てる。そして、本番では、火のついた松明を持って社殿に火をつけようとする者と、そのような攻撃から社殿を守るものとの熾烈な攻防が行われる。ゆえに、野沢温泉道祖神祭りは、日本有数の大規模な火祭りであると言われている。本稿では、とりわけ御神体台作成過程に着目、分析した結果を報告する。

御神体台の実物を、図1に示す。この御神体は、祭りの礼拝対象である、道祖神が宿るものであるとされる。一つのを毎年用いるのではなく、毎年新しく木を伐採し、作成している。男女のペアからなり、祭りの会場および周辺に3つ配置され、会場に近い順で、「長男・長女」「次男・次女」「三男・三女」と呼ばれている。今回検討するのは、次男・次女の御神体台作成である。

祭りの準備活動において、御神体台の作成は、重要な活動の一つとして位置づけられている。制作を中心的に担当するのは、以下で述べる三夜講の総括および副総括である。準備は祭り本番の数日前から開始されるのだが、総括および副総括には、御神体台作成作業に一定期間専念する時間が用意されている。台の作成中、OBや村民たちが期待を持って声を掛ける姿がしばしば見られる。御神体台作成の困難があれば、総括・副総括以外の仲間が助ける姿が確認できる。

### 2. 問題と目的

#### 2.1 御神体台作成をめぐる不確実性とその対処

この台の作成活動が認知科学的に興味深い点を、以下2点挙げる。その前に、前提として、台が毎年しっかり完成し、例年相当程度の同型性を持つ点を指摘しておこう。筆者が準備活動をフィールドワークした3年の間、御神体台の制作が本番前日までに終わっていないことは、一度もなかった。また、毎年多少の違いはあれど、同じ形のものが制作されていた。この事実を、一見すると、当たり障りのない当たり前のことのように



図1 御神体台（左：長男／長女、中央：次男／次女、右：三男／三女）

に思われる。しかし、本稿では、以下の点から、このこと自体が非常に興味深い現象であると考えられる。

第一に、御神体台を作成するにあたり、台を作成する成員たちが、この台の作成に熟達しているわけではない点である。このことを説明するために、祭り準備を担当する三夜講について説明しておこう。

祭り準備を行うのは、村民の男性である。準備を担当する彼らは「三夜講」と呼ばれている(榎本・伝, 2015)。三夜講のメンバーになりうる村民の男性たちには、生まれた年度ごとに「〇〇会」という名前が割り振られている。同年度生まれの男子同窓生集団に、〇〇会という名前が割り振られていると考えればよい。この同窓生集団が、前厄・本厄・後厄の3年度分集まって、一つの三夜講を構成する。一つの三夜講が3年分の祭り準備を担当し、一番下の年度の集団が厄年を終えたところで、新しい三夜講に移行する。ゆえに、3年に一度メンバーが一新する。

さらに、三夜講は、全員が等しく祭り準備にアクセスするわけではない。祭りの準備を中心的に担当するメンバーは決まっており、それは厄年の男たちである。ゆえに、3年でメンバーが一新する上、さらに中心担当も毎年変更する。このことが、本稿が注目する点と深く関連する。毎年中心担当が変更するということは、祭りを準備する本厄の成員が、昨年度主体的に御神体台の製作をした経験を持たないことを意味する。つまり、メンバーたちは、御神体台を作成する際に、自らの経験を主要なリソースとして参照することができない。この経験リソースの不在は、御神体台制作の不確実性を高めるといえよう。

第二に興味深い点は、環境条件が毎年変更する点である。上述したように、御神体台は雪で作成されている。当然ながら、毎年の天候により、雪の量は変わる。例えば、以下の分析で示すように、2020年の冬は記録的な雪不足であり、御神体台の作成も修正を余儀なくされた。このように、御神体台を作成するための材料リソースも、毎年不確定である。このことは、経験リソースの不在と同様、御神体台作成の不確実性を高めるといえる。

以上のことから、次の2点を指摘できる。1)主たる参加者が御神体台作成に関する経験リソースを十分持っておらず、2)毎年の素材リソースも変化していくとい

う2つの不確実性がある状況にも関わらず、担当たちは図1で示したような御神体台を毎年制作している。このことは、一体どのようにして可能になっているのだろうか。

一つのありうる説明は、これまで社会・文化的アプローチや状況論の立場に立つ研究者たちが主張してきたような、祭り準備を可能にする活動システムのなかに、御神体台を円滑に作成するための何らかの仕組みが隠されているというものだろう(cf. Hutchins, 1987)。本稿でもこうした視座に立ち、この仕組みについて、フィールドワークで得られた知見、および参加者らの相互行為の観点から実践を記述することで探求していく。

## 2.2 「再現すること」と「自分たちのものにするもの」の間のジレンマ

上記の「再生産」に関連させて、もう一つ問題を指摘しておきたい。その問題とは、「祭りを再現すること」と、「祭りを自分たちのものにするもの」をめぐるジレンマである。

三夜講の参加者らは、年度によって区別されるのみならず、以下の2点およびその関係からも構造化されている。第一に、担当する作業を振り分ける係による構造化である。例えば、祭り準備のリーダーである委員長／副委員長や、種々の道具を管理する道具係などの係が存在する。第二に、年度による序列化である。つまり、単純に年度で区切られているのみならず、ひとつ上の世代をリーダーとし、下の世代がフォローするという上下関係が存在する。そして、これら二つの構造の直行により、三夜講内のメンバーすべてに、上下関係を基準としたペアが割り振られている。すなわち、同一係内において、一つ上の世代の一名と、一つ下の世代の一名から形成されるペアが割り振られている。三夜講内では、このペアの間で、祭り準備活動のみならずプライベートに至るまで濃密な関係を築き上げる。この関係は、単純な親密な関係のみならず、ある種の責任を伴う関係でもある。

彼らは、一つ上の世代のペアの相方を「あんちゃん」と呼ぶ。本稿では、あんちゃんと対比させて、下の世代の相方のことを「弟」と呼ぶこととしよう<sup>1</sup>。そして、あんちゃんと弟のペアのことを「あんちゃん／弟関係」と呼ぼう。

<sup>1</sup> この「弟」という呼び名は、筆者がフィールドワークした限りにおいて、あまり使われることはない。あんちゃんは弟のことを、名

前で呼ぶことが多いように思う。ゆえに、「弟」はあくまで本稿の便宜上の呼び名である点に注意されたい。

さて、三夜講内では、この「あんちゃん／弟関係」を基礎として、以下の志向性が存在する。すなわち、「あんちゃんと同じ祭りを作る」という志向である。あんちゃんが祭り準備の中心担当のとき、弟は見習いとして参加する。弟は、この見習いのときに見たあんちゃんたちの祭りが、自分たちの祭りの決定的な基準であると理解している。ゆえに、弟は、見習い参加の際に、可能な限り、実際の制作物の寸法や作り方の手続きのメモを取り、可能なものは写真の撮影を行う。このような弟の姿勢は、三夜講全体を通して見られる普遍的なものである。

しかし、その一方で、彼らは「祭りを自分たちのものにする」必要があるようにも思われる。祭り準備の中心担当は、一生のうち、厄年の1回しか経験することができない。この祭りの経験は、村内における三夜講経験者たちのアイデンティティの一つとなる。ゆえに、自分たち世代の祭りは、他の世代とは差別化されねばならない。仮に、弟たちがあんちゃんの祭りを完璧にコピーできたとしよう。そのとき、その祭り準備の経験は、彼らのアイデンティティの基礎にならない可能性がある。なぜなら、あんちゃんと弟の差別化ができないからだ。

以上のことから、「あんちゃんと同じ祭りを作ること」と「祭りを自分たちのものにする」との間には、ジレンマが存在していると考えられよう。こうしたジレンマは、世代継承を行う実践において、一般的に観察されるジレンマの一つであるといえる。

本稿では、2.1にて述べた不確実性との関連から、三夜講がこのジレンマを解消する仕組みについて、一つの仮説を提示したい。この仮説はさらなるデータによる裏付けが必要であると考えられるものの、祭り準備を支える活動システムの理解について、あるいは祭り準備を支える三夜講の倫理の理解について、ある一つの見通しを提供するように思われる。

### 3. 方法

対象：本研究において中心的に検討する事例は、2020年1月10日・14日の道祖神祭り準備における御神体台作成過程である。この過程について、フィールドワークによって得られた知見およびフィールドノート、撮影した映像を参照し記述した。分析に使用する映像は、すべて筆者が撮影したものである。また、分析をフォローアップのための資料として、2020年1月14日の社殿作成についての映像も使用した。

分析：目的となっている二つの仕組みを分析するにあ

たり、まずフィールドワークによって得られた知見をもとに、参加者たちが置かれている文脈や背景情報の記述を行う。その後、御神体台作成の映像の分析においては、相互行為分析（西阪, 2008）の知見を部分的に援用しながら、参加者たちが相互行為内で、上記の課題に対し、どのような対処を行っているのか、参加者たちの理解に即して記述することを目指す。

## 4. 結果と考察

### 4.1 御神体台作成の不確実性を、参加者たちが対処するための仕組み

まず、フィールドワークによって得られた知見から、上述した不確実性に対処するために考えられうる仕組みについて検討しておきたい。

経験リソースの不在による不確実性に対処するための仕組みとして、第一に、指南者が関与した可能性が挙げられるだろう。すなわち、準備の中心担当が、経験の不在が原因で困難に直面した際、指南者が何らかの指示を与えることで対処している可能性である。この点については、こうした指南者の存在として、祭りを継続・維持するための組織である保存会の人々や、あんちゃんの存在が挙げられよう。しかしながら、指南者は、すべての実践に介入するわけではない。社殿作りなどの例外があるが、基本的には中心担当の自主性を重んじる傾向にある。よってあんちゃんはたまに顔を出す程度であり、積極的にトラブルへ指示を出すわけではない。また、筆者がフィールドに参加した限りにおいて、保存会の人々が御神体台作成についてコメントしていたのは、全体が出来上がった後のチェックのみであった。少なくとも、積極的に指示を与えているわけではない点は明確であるように思われる。したがって、指南者の指示によって不確実性に対処していた可能性は低いと考えられる。

第二のありうる仕組みとして、御神体台を作成する際に生じた困難を解消するために参照可能な情報が存在している可能性が挙げられよう。具体的には、設計図や、昨年度の写真などの情報である。この点について、少なくとも御神体台の作成については、三夜講が歴代受け継いでいるような公式のものは存在していない。しかし、上述したように、弟たちは、あんちゃんの祭り準備に見習いとして参加する中で、大量のメモと写真を撮影している。そして、1年を通した祭り準備の過程で、彼らはその情報を入念にまとめあげ、一冊のファイルにまとめている（図2）。このファイルは、特定の世



図2 情報がまとめられたファイル

代が限定的に作成しているものではなく、少なくともこの3年は継続的に作成されている。よって、この情報を元に、不確実性に対処している可能性が十分あるといえるだろう。

しかしながら、情報があつたとしても、その情報自体を不確実性に対処する仕組みであるとするのは早計であろう。なぜなら、たとえ御神体台作成に関するリッチな情報があつたとしても、円滑に台を制作するためには、以下に示す課題が残されているからである。

第一の課題は、上述したように、材料リソースの不確実性に関するものである。材料となる雪の状況は毎年変化する。しかし、当然ながら、昨年度記録された情報は、昨年度の環境を前提としている。よって、自身が担当する年度の状況と昨年度の状況が大きく違った際、昨年度の情報を鵜呑みにすると、最終的に雪が足りなくなるなどのトラブルが生じる可能性がある。この材料リソースの不確実性にも対処する形で仕組みは組み立てられていなければならないといえよう。

第二の課題は、Suchman (1987) が正しく指摘したように、情報は、現在進行中の活動と関連づけられなければ意味を持たない点である。この課題は、以下の抜粋1によく反映されている。

- 1 【抜粋1】  
 2 ((総括が御神体の間隔を報告している。))  
 3 総括 御神体、間が115から135  
 4 (1.0)  
 5 友想会 B hu hhu [hhu  
 6 友想会 C [いやそれは良[いんだけどだからあはは  
 7 友想会 B [良いんだけど aha 中心を教えてください

この事例では、3行目にて、総括がファイルから御神体の間隔に関する情報を報告している。だが、その情報は他の参与者に意味のあるものとして受け止められていない。これは、「御神体の間隔115cmから135cm」という情報が、どちらかの御神体の場所が確定するまでは、意味を持たないからであろう。しかし、活動の進行して、片方の御神体の位置が確定すれば、途端に間隔に関する情報は有意義になる。つまり参与者らは、ファイルに記された情報を、現在の活動のなかに適切に位

置づけ、利用する必要がある。

第三の課題は、情報を共有しなければならない点である。上述したように、祭り準備には様々な係があり、参与者たちに担当係が割り振られている。御神体台は、総括および副総括の2名が中心的に担当する。しかし、必ずしもこの2名のみで準備を完了するわけではない。御神体台の位置決めには、他の係の者も参加する。これは1) 御神体は非常に重く、2名では運ぶことが困難であること、2) 御神体台作成は祭礼に関わる活動であり、祭礼に関わる係も参加する必要がある、などの事情による。しかし、他の係の者は、御神体台作成に関する情報を事前に共有していないことも多い。そのため、彼らにもわかりやすく現在の活動に有意な情報を共有する必要がある。

## 4.2 御神体の位置を決める事例の検証

### 4.2.1 絶対参照点と位置決め失敗

以上の課題への対処について、ここからは実際に御神体台上の位置を相互行為を通して決定していく過程に関する事例を参照しながら検証していきたい。

まず、彼らが、しばしば環境内に残された、天候等の影響を受けずに絶対参照が可能な情報(以下、「絶対参照点」と呼ぶ)についての情報のメモを残していることを指摘しておきたい。例えば、民家の端や、民家の壁に見えている柱などである(図3)。このような絶対参照点のメモは、御神体台の作成以外にも、例えば位置を決める際に利用可能な家の位置など、他の祭り準備過程においても観察される。



図3 絶対参照される情報

(左：民家の左端、右：民家の柱とクリーム色の壁)

さて、以下で分析する抜粋2では、彼らはその絶対参照点を確認することから、御神体台の端の位置決めを開始している。しかし、実は、絶対参照点か位置を決める際の情報として意味を持つためには、1点の情報だけでは不十分であり、複数の点の情報が必要である。この複数の情報が不在であるため、抜粋2では、位置決め失敗している。

抜粋2は、「クリーム色の壁」(図3の右側)という絶

対参照点を共有している場面である。抜粋中の「友想会」とは、三夜講の中でも2020年に執り行われた道祖神祭りにて中心担当を担った世代である。この作業が開始される以前は、御神体台が作られる場所に雪の山があるだけであり、現在は、この雪山を削り、御神体台を作成していこうとしている。ただし、雪の山は、おおよそ御神体台の大きさに整形されており、その横に台の化粧や整形の際に利用する余った雪（以下、「残雪」と呼ぶ）が積まれていた。

抜粋2では、御神体台作成の主担当である総括が、担当外の参与者Bに対して、御神体台の端を認識可能にするために、端となる位置をスコップで少し掘ってマークするように指示している。そのための情報として、背後にあるクリーム色の壁の「真ん中」が絶対参照点として言語的に参照されている。

1	【抜粋2】	
2	総括	そのクリーム色の( )壁から
3		(0.4)
4	友想会 B	こっか↑ら
5		(0.8)
6	総括	その真ん中ぐら↑い
7		(0.2)
8	友想会 B	[[まんな↑か
9	総括	[[ちようど-
10	友想会 B	まんなか:
11		(2.0)
12	友想会 A	全然[( )
13	友想会 B	[全然この辺か↑い
14		(1.0)
15	総括	だけど:(.)この雪の量じゃ無理だから::つつつて: 変えよう:
16		(2.0)
17	友想会 A	こっち寄せちゃおうよ
18		(8.0)
19	総括	御神体、間が115から135

ただし、ここでは、必ずしも絶対参照点がそのまま端の位置として利用可能になっているわけではない点に注意したい。11, 12行目にて、総括に対し、Bから確認が求められている（おそらくAも同様の確認を求めていたと考えられる）。ここでの確認は、疑念を示すことで、「端はここではないこと」を確認しているように見える。14行目で総括は「(端の位置を) 変えよう」と報告していることから、少なくとも総括はAとBの発話を疑念として聞き、だからこそ端の位置を変えることを報告したのだと考えられる。AとBの発話を、総括がこのように分析した理由の一つは、雪不足のために雪の量が足りず、クリーム色の壁の真ん中が、明らかに残雪が積まれた位置にあったためである。Bは11行目の発話を、自らが移動し、残雪に登り始めた位置で産出し始めている。この移動と発話が組み合わされることで、ここでの発話が疑念としてデザインされてい

るように見えるといえよう。この疑念に合わせて、総括は、絶対参照点を端にすることを取りやめ、端の位置を変えることを報告している。すなわち、ここでは第一の課題であった、雪の状況が変化することで情報を鵜呑みにできない事態が生じているといえよう。

しかし、ここではさらに決定的な事態が生じている。それはおそらく、上述した第二の課題に関わる事態である。14行目の端を変えることの報告のあと、端の具体的な位置に関する指示が来ても良い位置にも関わらず、総括は続けて指示を産出していない。その後、17行目でAが端を内側へ寄せる提案をしてもなお、総括は指示を開始しない。そして、8秒の長い沈黙のあと、抜粋1の冒頭の御神体間の間隔に関する情報を報告している。

なぜ、この位置で、総括は沈黙したのだろうか。沈黙の間、総括は、手元のファイルを見ている。この振る舞いは、ファイル内に記載されている、さらに利用可能な情報を探していることを示しているように見える。これは同時に、現在認識されている情報である「クリーム色の壁の真ん中」が不十分であることをも示すだろう。

論理的に考えれば、クリーム色の壁の真ん中から、Aの17行目の提案どおり特定の長さだけを内側に寄せ、後に右側も同じ分だけ寄せれば、左右のバランスが取れた台を作ることができると考えられる。しかし、実は、この戦略を取ることは、現状の情報だけでは不可能なのである。なぜなら、クリーム色の壁の真ん中という1点からは、原理的に180度の方向全ての方向に線を引くことができるからである。すなわち、厳密に端を決めるためには、絶対参照点から引かれる線の角度を決定するもう一点の絶対参照点を必要とする。端の位置を決めるといふ活動のなかで、絶対参照点が無意味になるためには、少なくとも2点の情報が存在しなければならないのである。

#### 4.2.2 位置決め(部分的)成功

抜粋2の後に参与者たちが取りうる戦略は、次の二つだろう。一つはクリーム色の壁の真ん中と関係づいたもう一つの絶対参照点を探すことであり、もう一つは、全く別の関連づいた2点の絶対参照点を探すことである。彼らは、後者の可能性を選択した。もう少し正確にいうならば、抜粋1にて示されていた、中心を探し、その中心から雪の量に合わせて左右に等しく広げること、御神体台を作成するという戦略を取った。中心は、2体の御神体(次男/次女)からの距離が等しく



なる地点から定義できる。ゆえに、次に行われるのは、御神体の位置を決める作業である。

抜粋 3 は、総括が 2 つの絶対参照点を関連づけながら示すことで、少なくとも部分的には御神体の位置決めが成功する事例である。ここで総括は、他の参加者から「中心」に関する情報が求められたのち（抜粋 1 の 07 行目）、新たな指示を開始している（01 行目）。まず、総括は 01 行目にて、男（次男）の御神体が、図 2 の右側に示した民家の柱の位置であることを指示している。なお、01 行目の総括の発話中に産出されている「たぐち」は、参加者 A の名前である。次に、総括は、10 行目と 12 行目にて、「>これわかる<」と確認を求める形で、柱と反対側にある建物の左の隣（図 2 左側）を絶対参照点として示している。

#### 【抜粋 3】

（絶対参照される場所を伝えている場面。なお、01 行目「たぐち」は参加者の名前であったため、倫理的観点から違うものに変更してある。また、「男」は次男の御神体のことを示している。）

01 総括 : ちよ::あえ- そうそう 男が!::[: (0.4) たぐちの後ろの#柱ぐれ: !:  
Fig #fig1

02 参加者 A: うん #fig1

03 (0.8)

04 参加者 B: 柱

05 (2.0)

06 参加者 B: あ、この黒い|柱ってこ|と

07 総括 : [あ-あの柱ぐらい

08 (0.2)



09 参加者 B: この黒い柱|ってこと

10 総括 : | [0.2-# に

Fig #fig2

11 (2.6) #fig3 #fig4



12 総括 : >これわかる<  
13 (2.0)

14 参加者 A: [|じゃあ あれ

15 参加者 B: [|あじゃあじゃあやっぱここだな

16 (.)

17 参加者 A: そうだなじゃあじゃあこ男で

抜粋 3 において、総括はいくつか特徴的なやり方を用いて、2 点の絶対参照点を関係づけている。まず、総括は柱という情報を、その柱の最も近くにいたたぐち (A) と関連づけながら産出することで、参照すべき柱がどれなのかを際立たせている。そして、B によって対象となる柱の気付き (06 行目) が示された時点で、再度指示を与えている (07 行目)。ここまでは、抜粋 2 と同様、一つの絶対参照点を共有するやり方であるといえよう。しかし、ここから総括は、抜粋 2 とは違う振る舞いに移行する。総括は、09 行目の B の発話に自らの発話をオーバーラップさせながら、「の-に」と強い調子で助詞を産出している。この助詞は、直前の名詞である「あの柱」に戻り、発話をやり直すことをしているように見える。さらに、ここでは助詞が「の」から「に」

に自己修復されている点も興味深い。「の」の場合、その後には、柱に関連する情報（例：柱の上側、柱の横など）の産出が期待されると考えられる。一方、「に」は、柱に関係づけられた別の対象の存在を期待させるように思われる。例えば、「あの柱」に”この建物の左際を合わせた位置”というように。さらに、この柱と関係する別の対象は、代名詞「これ」(12 行目) で指示されている以外は、明確には言及されていない。そもそも、「あの柱に」という発話は、関連づけられる対象および述部を欠いており、統語的には文として完成していない。しかし、この発話を違和感なく理解できるのは、柱に関連づいた対象と発話の述部が、身体動作および進行中の活動を通して理解できるからであろう。

A は、総括の「に」を聞いて、総括に視線を向けながら、総括のほうへと歩き始める (fig2→fig3)。B は、A の振る舞いを見て、総括のほうへと視線を向ける。そして、総括は、この A と B 両方の視線が自分に向いたことを十分確認できる位置で、反対側を振り向き (fig4)、「>これわかる<」と確認を求めている。そして、その後すぐ、A と B に振り返り、先程視線を向けた先にある建物の左際をなぞるようなジェスチャーを産出している。すなわち、「に」によって A と B に対象の存在を期待させ、振り返りによって対象を限定し、確認の求めとジェスチャーの産出により対象をより限定的に指示することで、柱と関連づけられるべき対象を際立たせているといえよう。また、ここでの活動が、御神体の位置を決めるというものだったことを考えれば、柱と建物の左際に関する述部は、「その両者を合わせる」あるいは「その両者を合わせた位置に御神体を置く」であることが、容易に推論できよう。

以上の抜粋 3 で記述してきた総括の発話と身体動作の組み合わせは、第三の課題であった、A と B という本来担当ではない参加者に対し情報をわかりやすく共有することへ対処する一つのやり方だったと考えられよう。また、「御神体の位置を決める」という活動のなかに、ファイル上の情報を適切に位置づけていたという点において、課題 2 への対処にもなっていたといえよう。そして、これら 2 つの課題への対処が遂行されれば、中心が把握され、雪の量が少なくとも、当該年度において最善の御神体台を作成することが可能になる。ゆえに、課題 1 への対処でもある。

#### 4.2.3 残る不確定性への対処

抜粋 3 において、参加者らは、御神体の位置決めは

成功しているように思われる。15行目、17行目にて、AもBも「ここだな」「ここ男で」という発話を産出し、御神体の位置を理解したことを示している。

しかしながら、実は、これでもまだ十分に位置を決定できるわけではない。論理的にもそう考えられるし、参加者たちも、実際に解決すべき課題として、この課題に直面している。このことが明確に反映されている抜粋4を検討しよう。

- 1 【抜粋4】  
 2 ((総括は次女の位置を決めようとする。  
 3 しかし、Aが「前」についての情報を求める))  
 4 友想会 A 前は「前」  
 5 総括 [女が-(.)え: ま↑え  
 6 (0.2)  
 7 友想会 A まえ(.)まえ  
 8 (1.5)  
 9 友想会 A 奥行き  
 10 (0.4)  
 11 総括 え::::::::::つと150  
 12 (0.5)  
 13 友想会 A どっから?  
 14 (0.6)  
 15 総括 前から  
 16 友想会 B duhu[hu ¥前ってどこだよ  
 17 友想会 A [¥前って¥  
 18 友想会 A ¥どこが「前だよ¥  
 19 友想会 B [huwahahaha¥どこが前(だよ)¥

抜粋4は、抜粋3の直後である。抜粋3にて、男の位置が決まったので(決まったように思われたので)、総括が次に、女の位置を確定させ、中心を導出しようとしている。しかし、Aは、「前は前」(4行目)と、さらなる情報を要求している。この情報要求は、男の御神体の位置をマークしようとしたAによって産出されることで、男の御神体の位置決めに関わるものとして聞かれるだろう。この情報の求めに対し、総括は適切に答えられていない。

まず、総括は、4行目のAの情報の求めに対し、11行目にて、「150」と奥行きの長さに関する情報を与えている。この情報を与えるまで、少し長めの間が空くが(8行目、10行目、12行目、11行目の総括のフィラー)、これは総括がファイルの情報を確認していたためである。この情報と関連させて、Aは、この長さの基準点の情報を求めている(13行目)。そして、このAの情報の求めに対し、総括は「前から」と応答してしまう。「前」という基準点は、文脈によって明確なこともあれば、不明確なこともある。抜粋4では、1)御神体台の前から、2)御神体台前方に作られる階段の前から、3)御神体台前にある側溝の前から、と、少なくとも4つの候補がありうる。このような候補の多様性は、参加者たちも理解していると考えられ、だからこそ「どこが前だ

よ」という言わばツッコミ的な質問が産出されている。

このやりとりからわかるのは、御神体の位置を、奥行きまで確定させるには、これまで確認された2点の絶対参照点の他に、さらなる別の絶対参照点が必要だということである。2点では、線分上のどの位置をも取りうるからである。それでは、この不確実性はどのように対処されたのか。抜粋5にて検討しよう。

#### 4.2.4 位置決めの成功

抜粋5は、最終的に、御神体の位置を確定することに成功した事例である。ただし、ここでの位置期目の成功は、上述したような、新たな別の絶対参照点を文脈内に配置したことによって可能になったわけではない。ここではいわば、位置が「適当に」決められているように見える。

- 1 【抜粋5】  
 2 ((抜粋4のあと、「前」に関する情報(3行目の「階段  
 3 登ったところ」も前に関する情報)がいくつか議論された  
 4 あとの場面。))  
 5 総括 階段登ったとこなんだよな::::  
 6 (1.3)  
 7 友想会 B hua ha[hahahaha  
 8 総括 [(ギリギリ)  
 9 (0.5)  
 10 友想会 B [[そしたら(.)そし]たら[この[へんってことだ][な  
 11 友想会 A [[わかんないけど::] [すげ::] ]  
 12 総括 [(うん) (うん) (うん) (うん)  
 13 ん[だよな:::  
 14 [じゃあここに鬼のようにつまんじやいかんの  
 15 友想会 B [このへんってことだな  
 16 総括 そう: だから こん- この高さいらねんだ!よ  
 17 (0.3)  
 18 友想会 B うん: でもこっちにも雪あるだ[ろ  
 19 総括 [うん  
 20 (0.4)  
 21 友想会 A じゃあ ここでここでここでここ  
 22 友想会 B ここでいい?  
 23 友想会 A そこでいいんじやねん  
 24 (0.7)  
 25 友想会 A そこにしようよ  
 26 (2.1)  
 27 総括 いっか  
 28 友想会 A うん  
 29 (0.4)  
 30 総括 そこに立てて、台を合わせよう  
 31 (0.2)  
 32 友想会 A そうしよう

まず、抜粋前から5行目にかけての総括の発話に注目する。この発話は、抜粋4で総括が明らかにした150cmを計測するための起点に関する指示の求め(抜粋前にAが産出)への応答として産出されている。しかし、5行目が完結した位置では、この指示は完結していない。むしろ、総括は5行目前を手元のファイルに、5行目を階段となるべき場所に視線を向けることで、指示を行うために、今自分が考えている最中であるこ

とを、他の参加者に示している。

さらに、この総括の考えていることの内容は、5行目の総括の発話に反映されていると考えてよいだろう。しかし、この総括の考えていることは、実は、他の参加者たちに、絶対参照点の不在を理解させてしまう。総括は、5行目の発話の「登った」という語を過去形で産出している。さらに、その部分の発話の語気を強めることによって有標化している。この発話のデザインは、参加者たちに、御神体台に登った“後”の台の上部平面の端が、150cmを計測するための起点であることを理解させる。当然ながら、御神体台の上部平面の端とは、御神体台の端が確定した後にしか利用可能にならない参照点である。このような参照点は、絶対参照点を基礎として、活動と関連した様々な情報が配置されたり、その情報を元に対象となる環境自体が改変されたりすることによって、初めて利用可能になる参照点である。こうした参照点のことを、本稿では相対参照点と呼ぶ。

相対参照点は、位置が確定し、端の位置が確定した後の御神体台形成には有意味な情報である。しかし、ここでの参加者たちが展開している活動とは、まさにその端の位置を確定することそれ自体にほかならない。こうした活動を遂行するに際し、相対参照点を利用することは難しい。

以上のことを踏まえると、5行目が完了した位置は、総括の持つ情報が相対参照点であることが理解可能であり、この情報が位置決めを行うためにふさわしくない情報であることが理解可能な位置であるといえよう。6行目で少し間が空いた後、7行目でBが笑いを産出したのは、情報がないことや、あるいは情報がふさわしくないことのシリアスさを和らげているように見える。

この後、意外にも、御神体の位置の確定は、この総括の情報の利用不可能性が理解された後の位置で、主担当ではない友想会AおよびBによって開始されている(10行目、12行目)。Bは、「そしたら」という、新たな提案を期待させる接続詞を文頭につけ、御神体の位置が、「このへん(指差しとスコップを刺すことで指し示しめされた位置)」であることを報告している。視線はカメラの位置の問題で観察できないが、Bの身体全面は総括の方を向いており、Bはこの報告を総括に宛ているといえるだろう。総括も、Bの一度目の「そしたら」という発話とともに開始された指差しが御神体の位置を指し示したことを確認した位置、つまりBの報告内容がある程度予測できる位置で小さく「うん」と発話し、その後、Bの発話が順番交替適切場(Sacks,

Schegloff, Jefferson, 1974)に差し掛かったあたりで「そうなんだよな」と、Bの報告を受け止めている。

このBの御神体の位置の報告は、特に何らかの根拠を持って産出されているわけではない。そもそも、Bは御神体台作成の主担当ではないし、「このへん」という発話の際に、他の参照点を利用したような振る舞いは観察できない。同様に、11行目のAも、10行目のBの発話にオーバーラップしながら、「わかんないけど」と発話し、自分が位置を決めるための根拠や情報を持っていないことを示している。それにも関わらず、総括を含め、この場の参加者たちは、21行目以降、ここでAおよびBが報告・提案した位置を御神体の位置として確定していく手続きに入っている。すなわち、最終的な位置を確定できる絶対参照点が活動のなかに位置づけられていないにも関わらず、ここではAとBの主観を基準として、「適当に」位置の決定が行われているのである。

ただし、全くデタラメに位置が決定されているわけではない点に注意しよう。この場では、これまでの相互行為のなかで、2点の絶対参照点は位置づけられていた。すなわち、2点を結ぶ線分上のどこかであることは、参加者たちは理解できている状態である。この線分上という条件下で、彼らは「適当に」位置を決めているのである。

#### 4.2.5 小括

以上、発話と身体動作の組み合わせにより、ファイル内の絶対参照点に関する情報を活動のなかに明確に関連づけ、他の参加者が参照すべき対象の理解可能性を高めること(第三の課題への対処)、またこうした振る舞いを通してファイル内の情報が活動のなかで利用可能のように位置づけられること(第二の課題への対処)、そして、これらの対処を通して中心が導出されることで、天候の変化により雪の量が変わっても、最善の御神体台を作成することが可能になること(第一の課題への対処)を指摘した。

しかしながら、位置を完全に確定させるためには、絶対参照点は2点では足りず、最終的には「適当に」御神体の位置を確定させていることが観察された。実は、これまでのフィールドワークにおいて、このように参照される情報がないにも関わらず、現場の状況に合わせて「適当に」意思決定がなされる場面をいくつか観察したことがある。例えば、阿部(2017)では、初灯籠と呼ばれる祭具を作るにあたり、灯籠の柱を短く切り



すぎてしまった事例を報告している。この際、設計図情報という参照すべき情報が無視され、「先が細い」という主観的判断によって、柱は短く切られていた。

これらの事例を、怠慢や不注意などの単純な個人の能力や資質に帰属して処理するべきではない。本稿が分析した総括たちは、昨年度参加したときは、見習いだったことを忘れてはならない。総括たちは、どの情報が有意義な情報なのか、そして、自分たちが準備で使う情報はどれなのか、明確にはわからない状況で情報を収集していたのである。さらに、祭り準備は場合によっては豪雪および極寒のなか行われる。このような中、これだけの昨年度の情報が残されていることは、怠慢などでは決してなく、彼らの誠実性の傍証であるというべきだろう。

むしろ、本稿では次のように考えたい。総括たちのように、過酷な状況のなかで祭りの準備の情報を記録し、その情報を準備の際に生じる課題に対処するために限界まで活かすが、それでもなお存在してしまう不確実性に対して、個人の主観的判断で意思決定することで、彼らは祭り準備に対して主体性を発揮していたのである。こう考えることで、祭り準備の活動システム全体の観点から、主観的判断によって「適当に」意思決定することに、一つの機能的な意味を想定することができるように思われる。次節では、この点について考察する。

#### 4.3 不確実性の対処を通じた主体性の獲得

2.2 にて述べたように、「祭りを再現すること」と、「祭りを自分たち独自のものにすること」の間にはジレンマが存在していた。前節での議論を踏まえ、本稿では、このジレンマが解消される仕組みとして、以下の仮説を提示したい。準備の中心担当たちは、自分たちのあんちゃんの祭りを再現するという志向を、準備のための情報収集や、その情報を活かして準備を行うことで、限界まで突き詰める。しかし、限界まで突き詰めたとしても、環境の変化や準備の盲点などで、不確実性が生じる。このような不確実性から生じる問題に対し、情報を参照するのではなく、自らの主観的判断を用いて主体的に意志決定することで、祭りに自分たちの意志を反映し、自分たち独自のものにすることができる。したがって、「祭りを再現すること」を志向する中で生じる問題に主体的に対処することで、祭りを自分たち独自のものにすると考えることができる。限界まで準備した後に、主観的判断によって「適当に」意思決定することには、祭りを自分たち独自のものにするという機能的

意味がある。

この仮説の検証を考えた際、限界まで突き詰めていない段階での主体的意思決定がどのように扱われるのかや、限界まで突き詰められた状況で主体的意思決定が行われていない場面を分析することは有意義であろう。本稿では、これらの検証を詳細に行うことはできないが、フィールドで得た知見に、いくつか仮説をフォローするものがある。例えば、前者に関連するものとしては、三夜講ではしばしば利用される「段取りよく」という言葉がある。これは、事前準備をしっかり理解し、無駄なく準備をすすめるという含意があるのだが、この段取りを理解せず作業を進めた者が、叱責されることがあった。後者に関連するもので言えば、年長の指南者たちが、三夜講に対し「自分たちで考えてやれ」と声をかけることがあった。この「自分たちで考える」とは、当然ながらすべてを自分たち独自のものにしろという主張ではなく、情報に頼りすぎるなという含意があるように思われる。

本稿の最後に、ここでは以上の仮説に深く関連すると思われる事例を検証しておきたい。この事例は、御神体作成場面ではないが、準備担当者たちが主体的に意思決定しなければならない場面において、環境外の情報を参照することで、その問題に対処していた。抜粋6を検討しよう。

- 1 【抜粋6】  
 2 ((保存会の人々が、社殿の桁材を固定する高さの位置を調整している。  
 3 その際、2点間の高さを揃えるため、水平器が用いられている。  
 4 なお、抜粋中の「ひろや」は保存会Cのことをであり、倫理的な配慮か  
 5 ら名前を別のものに変更している。))  
 6 保存会 A 高さ出すほうもまた難しいね::↓::  
 7 (1.8)  
 8 保存会 C (長さすね::)  
 9 保存会 A う:::↓ん  
 10 (0.4)  
 11 保存会 A そうだね::↓::  
 12 (0.2)  
 13 保存会 A 合わせて水平器のせるしかないね::  
 14 ((中略))  
 15 保存会 A ひろやそつちの木じゃねえ ( [ )  
 16 保存会 B [横の木[だよ  
 17 保存会 D [ひろやそつちじゃねえぞ  
 18 (0.2)  
 19 顧問 E ひろやちが[うぞ::  
 20 保存会 D [huhahahahaha  
 21 保存会 A ( )  
 22 (0.9)  
 23 顧問 E -> 目見当ていい目見当て  
 24 (2.3)  
 25 保存会 D 俺そつち切っちゃうよ:  
 26 (3.4)  
 27 顧問 E はいそこそこ

抜粋6は、社殿をを支える桁材の高さを決めている場面である。この作業は、年長者によって組織された保



図4 社殿の桁材を固定する高さの位置決め

存会および顧問の人々が中心的に担当している。顧問の人々のほうが歳上であり、基本的に、保存会は顧問の指示に従う。この抜粋では、保存会の人々が、桁材を固定する高さを測っている。そのために、まず長い棒を2本の柱に対して垂直に合わせ、その棒の上に、接地面が水平であるかどうかを判別する水平器を置き、水平出しをしている。そして、水平になった位置を桁材を固定する位置を判断し、柱のその位置にペンで印をつけようとしている(図4)。

しかし、15, 16, 17, 19行目で指摘されているように、Cは印をつける木を間違えてしまう。そこで、再度印をつけるために、Cが印の基準となる棒が水平になっているかを確認しようとしたところ、顧問のEは「目見当でいい目見当で」(23行目)と発話し、Cに対して水平器で細かく確認するのではなく目見当で印をつけるように求めた。そして、慎重に印をつけようとするCに対して、顧問は「はいそこそこ」と、やはり目見当で印をつけるように求めている。

この顧問Eの振る舞いは、水平器を使って判断・意思決定するのを忌避しているように見える。実は、この抜粋の前にも、別の箇所の位置を決定するやり取りにおいて、別の顧問が全体のバランスを考えると、東がやや高くなることを指摘した上で、「そんな土方の水平なん持ってこんでいいから」と、水平器に対する忌避感を表明している。また、同じ場面にて、顧問Eが今まで目見当でやってきたことを報告していることから、水平器を使うのが今年初めてであったことがわかる。しかし、水平器に対し、なぜこのような忌避感が生じているのだろうか。

確定的なことが言えるわけではないが、これまでの分析を踏まえ、一つの可能性を示しておこう。水平器を用いるということは、高さの位置を判断するための根拠を、環境内の情報の参照や自らの主観的評価に求めるのではなく、機械というデジタルな水準に求めると

いうことになる。デジタルな情報は、本稿が検討してきたような不確実性を消去することになるだろう。例えるならば、御神体の位置を決めるために、GPSを用いるようなものである。顧問たちは、このようなデジタルの確定性、あるいは不確定性の消去に対し、忌避感を抱いていたのではないだろうか。デジタルを基準とすることが基本になれば、不確定性はなくなる反面、おそらく祭りは毎年画一的なものとなっていくだろう。また、毎年起こる環境や状況の変化に対しても脆弱になるのかもしれない。なにより、参加者たちが、祭りを自分たちのものにしていく機会が失われる。顧問たちの忌避感、こうした事態に対応していたように思われる。

## 文献

- 阿部廣二.(2017). 問題発見のシークエンス分析：野沢温泉道祖神祭りの準備活動の事例から. 2017年度日本認知科学会第34回大会論文集. 553-562.
- 榎本 美香・伝 康晴.(2015). フィールドに出た言語行為論:「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性. 認知科学, **22**, 254-267.
- Huchins, E. (1987). Learning to navigative in context. Paper presented at workshop on context, cognition and activity. Stenugsund, Sweden.
- 西阪仰.(2008). 分散する身体：エスノメソドロジ的相互行為分析の展開, 勁草書房.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language*, **50**, 696-735.
- Suchman, L. (1987). *Plans and situated actions : the problem of human-machine communication*. Cambridge: Cambridge University Press.